



◆◆◆◆ 上手な叱り方 ◆◆◆◆

先日、大きな本屋さんに入った時、仕事柄、つい育児書のコーナーで足が止まりました。そこには、ずらりと子育ての本が並んでいましたが、しばらく眺めているうちに「叱らない子育て」と言うことばが目にとまりました。手に取って中身を読むうちに、著者の考え方が見えてきました。どうやら、自分が子ども時代に厳しく叱られたために、その反動として、何が何でも叱るべきでないという考えを持つに至ったようです。確かに、彼女の経験から、親たちは大いに学ぶべきところがあります。いくら子どものためを思って叱っても、その叱り方を間違えたら、子どもは心を深く傷つけられ、最悪の場合、自分は親から愛されていないと感じたりしてしまうからです。でも、それでは、仮に子どもが友だちのおもちゃを横取りしても、親のお財布から勝手にお金を抜き取っても、あるいは、家の中ではサッカーボールを蹴らないと約束させておいたのに、留守中に約束を破ってガラスを割っても、叱ってはいけないのでしょうか。そんなことはないでしょう。

問題は叱り方なんです。「バカね！ 何度言ったら分かるの!？」と言ったら、してしまった悪いことを反省させるのではなく、その子の人格そのものを否定してしまうことになってしまいます。そうなったら叱る意味がありません。こんな時は、冷静にその子の両肩に手を載せて、子どもの目線にまで姿勢を低くして、次のように言って下さい。「○○ちゃん、どうしてガラスが割れたのかな？ そう、約束を破ってボールを蹴ったからだよね。それじゃ、まず謝らなきゃいけないね。さあ、どうやって片付けたらいいか教えてあげるから、掃除機を持っておいで。」



◆◆◆◆ 食卓を囲むこと ◆◆◆◆

あなたは、お子さんと週に何回くらい食事をしていらっしゃるでしょうか。朝食でも夕食でも外食でも、どれくらい食卓を囲んで会話を交わしているでしょうか。

私たちは、親しい人間関係を作ろうとする時、なぜか一緒に食事をするものです。久しぶりに友人と電話で話した時に「今度、ゆっくり食事でもしようよ」という言葉がよく出てくるなど、とにかく人は一緒に食事をすることで、親近感を覚えます。

これは親子関係にも言えることです。実は、子どもと一緒に食事をするには、想像以上に大きな影響力があるのです。ある調査によると、週に5回以上、子どもと食事をする家庭では、子どもが非行に走る割合が激減するという結果が報告されているのです。また、子どもと食事をする回数を増やしていくと、それに比例するかのよう学力が上昇していくことも確認されています。一体どうしてでしょうか。

一緒に食事をしていると、そこには自然に会話が生まれます。学校のこと、友だちのこと、テレビや映画のこと、お手伝いやお小遣いのこと。日常ありふれたことから、時には子どもがかかえる深刻な悩みを知らされることもあります。そんな時、親は自分の経験談を交えながら、教えたり励ましたりすることができます。その結果、子どもは親から大切にされている、愛されていると感じ、情緒が安定します。また、好奇心を刺激されて、学習意欲を高められたりするので。

反対に、もし親が子どもとほとんど食事をしないなら、一体どこで子どもと親しく話す機会があるでしょうか。どこで善悪を教えられたり、やる気を引き出されたりするでしょうか。ときどき親たちは、日頃の埋め合わせをしようとして、旅行や特別なイベントを計画したりします。それはそれで良いことだし、楽しい時を過ごすことができると思いますが、それだけでは子供の日常生活を知ることは出来ないし、適切なアドバイスを与えて励ましたり、悩みに耳を傾けてあげたりすることはなかなかできないでしょう。

子供の健全な成長のためには、親しい親子関係を保つことが最大の鍵になりますが、その親しい親子関係を築くためには、日々の生活の中で楽しく会話を交わしながら食事を共にすることが最も効果的と言えるのです。

この紙面は、下府中小学校PTA家庭教育講座として、連載をいただいています。